

グループ経験におけるリーダーシップのタイプとメンバーが受ける影響の関係について

武 山 雅 志

(松 原 病 院)

1960年以後、アメリカを中心にして普及してきたグループ経験は、わが国においても近年その活動が積極的に行われている。ここでいうグループ経験とは、感受性訓練、Tグループ、グループ・カウンセリング、エンカウンター・グループなどと呼ばれているものを指している。これらのグループ経験は、正常者の精神的健康の増進や自己実現を目標としている。グループ経験に携わる者としてはその目標が充分満たされているのかが重要な関心事の1つである。このような観点から、従来、多くの研究が発表されている。

このいわゆる効果研究においては、その効果に影響を及ぼすと思われる要因が多数考えられる。従来、患者変数、治療者変数、または両者の相互作用、治療技法といった側面から研究がおこなわれてきている。本研究においては、グループ経験における患者と治療技法との相互作用という観点から効果研究をおこなおうとした。

問 題

Rotter (1966) は、その社会学習理論から、外的統制と内的統制という概念を提示している。外的統制とは、社会事象の成功・失敗は、自分の力ではどうしようもない外からの力、例えば、運命、偶然、運とかによって左右されているという考え方である。内的統制とは、社会事象の成功・失敗は、自分の能力や努力によるものだと思なす考え方である。そして、この概念を測定するものとして29項目から構成されるI-E (internal - external) 尺度を考案した。この尺度を用いて近年、臨床分野での多くの研究が報告されている。グループ経験に関するI-E尺度を使った研究もいくつかみられる。その中に効果研究においては、患者と治療技法との相互作用という観点からのものがある。これらの研究では、以下に述べる仮説が検討されている。外的統制型の人、内的統制型の人よりも、指示的治療によってより改善する。逆に内的統制型の人、外的統制型の人よりも、非指示

的治療によってより改善する。この仮説が相互作用仮説である。

Kilmann & Howell (1974) では、入院中の薬物依存の女性患者84名を対象として、この仮説の検討をおこなった。グループは23時間連続しておこなわれるマラソン・グループで指示的グループと非指示的グループのそれぞれ2グループずつであった。比較検討のために、治療を全く受けない統制群が1グループ作られた。結果は仮説を支持するものではなかった。すなわち内的統制型の人、指示的グループ、非指示的グループを問わず、治療後で外的統制型の人と比較して、より大きな改善を示した。

Kilmann & Howell (1974) を追試したのが Kilmann, Albert & Sotile (1975) である。この研究では、2つの研究がおこなわれた。はじめは、16時間のマラソン・グループが用いられた。次に週2セッション、1セッションにつき2時間で、4週間続くグループを使った。いずれも、構造化されたグループと構造化されないグループが作られた。参加メンバーとしては大学生が募集された。効果判定のためにグループ実施前と、全セッション終了2日後そして4週間後に検査がおこなわれた。結果は、両研究ともこの仮説を支持するものであった。

Abramowitz, Abramowitz, Roback & Jackson (1974) は、この仮説を検証するために、26名の大学生を対象とした。指示的な3グループと非指示的な1グループが、週2セッション、1セッションにつき90分で、5週間実施した。効果判定のためのデータは第1セッションの数日前と、最終セッション後数日たって得られた。学生にとって重要だと思われる独立心・学業達成・愛情という領域についての期待、自尊心、不安などを測定する10個の測度を用いた。結果は、仮説を支持するものであった。

このように相互作用仮説は、さまざまな形で研究されている。しかし、ある研究ではその仮説を支持するような結果であるのに対して、別の研究ではそれを支持しないという具合に、充分納得のいく結論が出せる段階とはいえない。

また、Rotter (1975) は I-E 尺度を用いた研究全般にわたってその使用上の誤りが少なくないことを指摘している。Rotter (1975) によれば、I-E 尺度はあくまでも一般化された期待についての測度であり、広範囲の状況における予測を可能にするものである。これは裏返せば、ある特定の状況における予測をおこなうものとしては、I-E 尺度はあまり適切なものとは言えないということになる。

また相互作用仮説をめぐる研究に対して、批判を加えている研究者に Messer & Meinster (1980) がいる。Messer & Meinster (1980) は、従来の研究のデザインや統計的な分析方法、効果判定の測度の欠点について言及し、これらの研究結果が充分信頼性のあるものと言えないと述べている。Kilmann et al. (1975) では仮説を支持する結果が得られたと言うが、評価に用いた2つの測度のうち、POIの下位尺度のうちの1つだけが有意であるだけであったと批判している。Abramowitz et al. (1974) に関しては、参加メンバーが少ない上に、データ処理の際に、「変化なし」というメンバーを分析から除いていることの問題点を指摘している。最後に Messer & Meinster (1980) は、グループ治療の内容を充分記述し、再現可能にする必要性や、自己報告とともに行動的な側面も査定すべきことなどを述べている。

Rotter (1975) と Messer & Meinster (1980) のこのような指摘をふまえて、次のような改良を本研究ではおこなおうとした。

まず、指示的・非指示的という点をどのように定義するか、この点を問題にした。本研究においては、リーダーの発言を分類するという手続きをとることにした。Lieberman, Yalom & Miles (1973) は、リーダーの行動を因子分析し、Intrusive Modeling, Cognitizing, Command Stimulation, Managing or Limit-Setting, Attention Focusing, Mirroring, Affective Support の7カテゴリに分類しているが、本研究ではこのうち、Intrusive Modeling, Cognitizing, Command Stimulation をまとめて指示的発言、Attention Focusing, Mirroring, Affective Support を非指示的発言に2分した。

Intrusive Modeling とは、リーダーが自分自身の感情や信念を表現したり、メンバーと対決したりするものである。Cognitizing は説明や解釈をメンバーに与えるものである。Command Stimulation はメンバーに質問したり、発言を要求したりするものである。Attention Focusing とは、他のメンバーとの比較や類似を強調するものである。また Mirroring とは、メンバーが表明し

た感情をそのままリーダーが発言するというものである。Affective Support はあるメンバーを他のメンバーから保護したり友情や愛情、賞讃を与えるものである。

このような分類に基づいて、指示的グループ、非指示的グループという独立変数の妥当性の検討をおこなった。

また、I-E 尺度については、鎌田・樋口・清水 (1982) の Locus of Control 尺度 (以後 LOC 尺度と略す) を用いて、問題点を除くように努めた。LOC 尺度は、Rotter (1966) の I-E 尺度や他の I-E 尺度を参考にし、鎌田他 (1982) が作成し、その信頼性と妥当性を検討したものである。この尺度においては、Rotter (1966) の I-E 尺度に含まれているような社会・政治的事象に関する項目は入っていない。また自分自身についての統制を反映するように「あなたは……と思いますか」という形式で項目が統一されている。

このように、本研究では、指示的グループ、非指示的グループおよび I-E 尺度という独立変数に関して改良した上で相互作用仮説を検証しようとした。

方 法

1. 各群の構成

指示的グループとしては、昭和58年度金沢大学教育開放センター主催の「心理学セミナー」のうち、「人間性心理学」への参加者を対象とした。非指示的グループとしては、同セミナーの「エンカウンター・グループ」への参加者を対象とした。

指示的グループは、19名の参加メンバーとリーダーおよび筆者で構成されていた。19名の内訳は、男性1名、女性18名であった。そのうち、女性1名が drop out し、女性1名が転居のため途中から参加できなくなった。男性1名は「エンカウンター・グループ」にも参加していたため、結果の分析から除かれた。その他にも、資料不足のケースがあったので最終的に結果の分析に用いられたのは女性9名のデータであった。

非指示的グループは、11名の参加メンバーと、リーダーおよび筆者より構成されていた。11名の内訳は、男性2名、女性9名であった。そのうち男性1名は、前述したように、指示的グループにも参加していたため、結果の分析からは除かれた。最終的に結果の分析に用いられたのは男性1名、女性9名のデータであった。

両グループは、昭和58年6月に始まり、月に1セッション、約2時間半の頻度で、別々の曜日におこなわれた。そして両グループともに昭和59年3月まで合計10セッションおこなわれた。

両グループとも第1セッション終了後、鎌田他（1982）のLOC尺度を実施した。鎌田他（1982）の平均得点が、50.21点であることを参考にして、51点以上の者を内的統制群とし、それ未満を外統制群に分類した。指示的グループにおける内的統制群を指示的・内的統制群（以後DI群と略す）、外統制群を指示的・外統制群（以後DE群と略す）と名付けることにする。同様に非指示的グループの内的統制群を非指示的・内的統制群（以後NI群と略す）、外統制群を非指示的・外統制群（以後NE群と略す）と名付けることにする。このように両グループを内的統制群と外統制群に区別するのは結果の分析の際の下位分類であって、実際には両者がいっしょになって、それぞれのグループを構成していた。

各群ごとのLOC尺度得点を示したのが、表1である。DI群とNI群およびDE群とNE群の間でそれぞれLOC尺度得点に差がないかも検定をおこなった。その結果、いずれの間にも有意な差はみられなかった。ゆえに両グループの内的統制群と外統制群のそれぞれにおいて、LOC尺度得点の平均値では差がなく、比較可能であると思われる。

表1 各群のLOC得点の平均と標準偏差

群	平均	標準偏差
DI	57.0	2.92
DE	45.5	1.73
NI	55.0	2.45
NE	48.0	1.63

各群の平均年齢とその範囲、および平均教育年数を示したのが表2である。NI群がやや年齢が低いようであるが、年齢の範囲からはほぼ同じとみてよいであろう。以前にグループ経験に参加したことがあるか、また何回ぐらいか尋ねてみたところ以下のようであった。初参加の人は、DI群で2名、DE群で2名、NI群で5名、

表2 各群の平均年齢と平均教育年数

群	人数	平均年齢(歳)	年齢の範囲(歳)	平均教育年数
DI	5	43.6	24~58	13.2
DE	4	42.0	25~53	13.5
NI	6	34.3	26~45	15.0
NE	4	39.5	24~52	16.0

NE群で2名であった。NI群に初参加という人が多いように思われる。10回以上グループ経験に参加したことがあると答えた多数回参加者はDI群に2名あった。参加メンバーの職業は次の通りであった。教師は、DI群に1名、DE群に1名、NI群で3名であった。看護婦はDE群に1名、NE群に2名であった。主婦専業はDI群で1名、DE群で2名、NE群で1名であった。

2. リーダー

リーダーは10年以上のグループ経験を持ち過去70回程度のファシリテーターまたはリーダーとしての豊かな経験を持っている臨床心理学者であった。その立場はヒューマニスティックなものであった。この1名が両グループのリーダーをつとめた。

指示的グループにおいては、リーダーは、対人関係を中心テーマにした講義や、グループ・エクササイズ、ビデオ鑑賞などを指導した。

非指示的グループでは、ベーシック・エンカウンター形式で、リーダーはファシリテーターとして参加していた。

なお、指示的グループ、非指示的グループとも、筆者がコ・リーダーまたはコ・ファシリテーターとして参加していた。

3. リーダーの発言内容

指示的グループと非指示的グループを実施したが、果たして独立変数として妥当なものであるかどうか確かめようとした。各セッションをビデオ録画し、それをもとに両グループの第2セッションと第4セッションを、前期、中期、後期に分けて逐語記録した。前期とはセッション開始から15分間である。中期とはセッション開始1時間後から1時間15分までをいう。後期とはセッション終了15分前から終了までをいう。逐語記録の中のリーダーの発言を、Lieberman et al. (1973)のリーダー行動の分類に基づいて、指示的発言と非指示的発言に分類した。

その分類結果を示したのが表3である。分類は筆者がおこなった。なお分類の信頼性をみるために本研究に関係していない臨床心理学者に依頼して指示的グループの第2セッションの分類をおこない、一致率を調べた。分類できなかった発言を除いた一致率は70.8%であった。表3には分類した結果を発言回数で示してある。 χ^2 検定の結果発言回数において、指示的グループの方に指示的発言の割合が高いことが明らかとなった($\chi^2=17.9$ $p<.01$)。ゆえに、本研究における指示的グループ、非指示的グループは独立変数として妥当なものであるといえる。

表3 リーダーの発言内容の分類（回数）

	指示的グループ	非指示的グループ
指示的発言	39	14
非指示的発言	16	34

（単位：回）

4. LOC尺度

両グループの第1セッション終了後、LOC尺度の用紙を各メンバーに渡し自宅にて実施し、郵送にて返してもらった。

LOC尺度は18項目から構成されており、各項目は4段階に評定するようになっている。それゆえ得点の範囲は、18点から72点までであった。得点が高くなればなるほど、内的統制の傾向が強くなるように採点された。

5. SD法

両グループの第1セッション終了後および最終セッション終了後に各メンバーにSD法の用紙を渡し、自宅にて実施し、郵送にて返してもらった。

SD法はSmith (1962) が用いたものを多田 (1982) が邦訳した26対の形容詞を使用した。各形容詞対は7段階に評定した。この形容詞はSmith (1962) によれば、自己概念の6つの次元を測定しているものである。本研究においては多田 (1982) と同じ「わたし」および「人間」の2種類の概念を使用した。なお本研究では相互作用仮説でいうところの「改善」を、SD法における評定の肯定的な方向への変化に反映されていると考えている。

結 果

1. 各群の両概念の変化

SD法の結果、第1セッションから最終セッションまでどの程度評定が変化したか、その平均値を各群ごとに示したのが表4と表5である。なお表4と表5の表中の形容詞はすべて、その対のうち肯定的なものとして考えている。

このSD法の結果について各項目ごとにリーダーシップ（指示的・非指示的）、LOC（内的統制・外的統制）の2×2の2要因の分散分析をおこなった。その結果を示したのが表6と表7である。

相互作用仮説からは分散分析の結果、交互作用が有意となり、更に指示的グループにおけるLOCの影響と非指示的グループにおけるLOCの影響という単純主効果が逆方向で有意になること、すなわち指示的グループでは外的統制群に評定の肯定的変化が大きく、非指示的グ

ループにおいては内的統制群に評定の肯定的変化が大きいことが期待される。

しかし、表6からわかるように交互作用が有意であった項目は「わたし」概念で「固い」と「強い」だけであり、「人間」概念では「大きい」という一項目のみであった。

更にその項目の単純主効果を調べると、「わたし」概念の「固い」では、指示的グループにおけるLOCの単純主効果は有意であり相互作用仮説に沿った結果であった（ $F=6.36$ $P<.05$ ）。しかし、非指示的グループにおけるLOCの単純主効果は相互作用仮説に沿った方向であるが、有意ではなかった。

また「わたし」概念の「強い」という項目では、指示的グループおよび非指示的グループにおけるLOCの単純主効果はともに相互作用仮説に沿った方向であるが、有意ではなかった。

「人間」概念の「大きい」でも指示的グループと非指示的グループにおけるLOCの単純主効果は有意でなく、その方向も相互作用仮説に沿ったものではなかった。

このようにいくつかの項目で有意な交互作用を示したが、相互作用仮説を支持するような結果は見られなかった。

その他、有意差のみられた項目について「わたし」概念を見ていくと、まず「自然な」においてリーダーシップの主効果が有意であり（ $F=4.65$ $P<.05$ ）、指示的グループに比べて非指示的グループの方が評定の肯定的変化が見られることが明らかとなった。

「価値のある」ではLOCの主効果が有意であり（ $F=10.23$ $P<.01$ ）、リーダーシップのあり方にかかわらず、内的統制群が外的統制群より肯定的変化があった。

「大きい」についても、LOCの主効果のみが有意であり（ $F=6.02$ $P<.05$ ）、リーダーシップのタイプに関係なく、外的統制群が内的統制群に比べて肯定的変化が見られることがわかった。

「しっかりした」でも、LOCの主効果のみが有意で（ $F=7.50$ $P<.05$ ）、リーダーシップのタイプに関係なく、内的統制群が外的統制群よりも肯定的変化が大きいという結果であった。

「人間」概念について見ていくと、「価値のある」という項目では、LOCの主効果が有意で（ $F=5.04$ $P<.05$ ）、リーダーシップ・タイプにかかわらず、内的統制群の方が外的統制群よりも肯定的変化が見られた。

「大きい」に関しては前述した交互作用の他、リーダーシップの主効果も有意であり（ $F=4.99$ $P<.05$ ）、非指示的グループが指示的グループよりも肯定的変化を

表4 「わたし」概念の評定の变化の平均値と標準偏差

因子	項目	D I 群		D E 群		N I 群		N E 群	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己尊重	満足した	.00	(.71)	1.00	(.82)	.50	(.55)	.50	(1.00)
	安定する	-.20	(1.48)	.75	(2.22)	.50	(1.38)	.75	(.96)
	幸福なる	.20	(1.10)	-.25	(.50)	.67	(.52)	.25	(.96)
	成功する	.60	(.80)	-.25	(.50)	.50	(1.05)	.50	(1.00)
	自然なる	-.40	(1.14)	-.25	(.50)	.67	(.82)	.50	(1.00)
	自信のある	.80	(.84)	-.25	(1.50)	.00	(1.10)	.00	(1.63)
対人価値	価値のある	.20	(.45)	-.50	(1.00)	.83	(.41)	-.25	(.50)
	よ親しい	.20	(1.30)	-.75	(.96)	.50	(1.38)	-.25	(1.26)
	親切なる	-.60	(.55)	.00	(.82)	.17	(.41)	-.50	(1.00)
	親しみのある	-.20	(.84)	.50	(.58)	.50	(.55)	.50	(.58)
	感じのよい	.00	(.71)	.00	(.82)	.83	(.75)	.25	(.50)
肥満性	人に好かれる	.00	(.00)	-.25	(1.26)	.33	(.82)	.00	(.00)
	軽大い	-.20	(1.48)	.75	(1.71)	.33	(.82)	-.25	(.50)
	やさしい	.80	(.84)	1.00	(.82)	-.67	(.82)	1.25	(1.26)
力量性	きつ	-.20	(.45)	.50	(1.00)	-.17	(.41)	.00	(.00)
	柔軟	.40	(.55)	2.00	(2.45)	1.00	(1.10)	.50	(1.29)
	強い	.40	(.55)	1.25	(1.71)	1.00	(1.10)	-.50	(1.29)
独立性	細い	.00	(.71)	-.75	(.96)	-.17	(.75)	.00	(.82)
	人の先に立つ	-.20	(1.30)	.25	(.50)	.33	(.52)	-.25	(.50)
	するどい	.20	(.45)	-.25	(.50)	.33	(.52)	.50	(1.00)
	頭すぐれた	-.20	(.45)	.25	(1.26)	-.17	(1.17)	.50	(1.00)
緊張性	くつろいだ	.20	(.84)	-.50	(.58)	.17	(.41)	.50	(1.00)
	生き生きした	.00	(2.55)	1.50	(1.29)	1.00	(2.10)	.00	(.82)
	健康な	-.40	(1.14)	.50	(.58)	.83	(.98)	.25	(1.71)
	健康な	-.80	(1.79)	-.25	(.50)	.50	(1.05)	.75	(.96)
	しっかりした	1.20	(1.30)	.25	(1.26)	1.33	(.82)	-1.00	(1.83)

注) 表中の数字は、肯定的変化を+とし、否定的変化を-として示している。

表5 「人間」概念の評定の变化の平均値と標準偏差

因子	項目	D I 群		D E 群		N I 群		N E 群	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
自己尊重	満足した	-.60	(2.30)	-.75	(1.50)	-.17	(1.33)	-.25	(2.75)
	安定する	-.60	(1.14)	-.25	(2.99)	-1.17	(1.60)	1.50	(1.73)
	幸福なる	-.20	(1.30)	1.00	(2.00)	.00	(1.26)	-.25	(.50)
	成功する	-.60	(1.14)	-.25	(2.50)	.17	(1.17)	.25	(1.26)
	自然なる	.00	(1.87)	.25	(1.50)	.67	(1.51)	-.50	(1.00)
	自信のある	.20	(.84)	-.25	(.96)	.83	(1.47)	-.25	(.96)
対人価値	価値のある	.40	(1.14)	-2.00	(2.31)	.50	(1.05)	-.50	(2.08)
	よ親しい	.60	(.89)	-.50	(2.52)	.50	(1.05)	1.00	(1.41)
	親切なる	-.40	(.89)	.75	(1.71)	-.33	(.82)	.75	(2.22)
	親しみのある	.00	(.71)	.00	(1.15)	.00	(1.26)	1.00	(1.83)
	感じのよい	-.60	(1.67)	.50	(.58)	.00	(.89)	1.00	(1.41)
肥満性	人に好かれる	-.80	(1.10)	-.25	(1.26)	-.17	(.41)	.25	(.96)
	軽大い	.20	(.45)	-.25	(.96)	.17	(.98)	.75	(1.50)
	やさしい	-.20	(.84)	-1.50	(2.52)	-.17	(.98)	1.75	(1.89)
力量性	きつ	.00	(.71)	-.50	(1.73)	.17	(.41)	.00	(.82)
	柔軟	.40	(.89)	1.25	(3.40)	.33	(1.03)	.75	(.96)
	強い	.20	(1.10)	1.00	(2.71)	-1.67	(2.07)	-.50	(1.29)
独立性	細い	.00	(1.58)	-1.00	(3.37)	1.00	(.63)	.00	(.82)
	人の先に立つ	-.20	(1.10)	-.50	(2.38)	.67	(1.03)	.25	(.50)
	するどい	.00	(1.22)	.00	(1.41)	.00	(1.10)	.00	(1.63)
	頭すぐれた	.40	(.89)	-1.25	(1.50)	-.17	(1.47)	-.25	(.50)
緊張性	くつろいだ	.40	(1.14)	-.50	(1.00)	.17	(1.33)	.50	(.58)
	生き生きした	.00	(1.41)	-.25	(.96)	-.50	(.84)	.25	(.50)
	健康な	.00	(1.41)	.75	(1.26)	-1.00	(1.41)	.75	(.96)
	健康な	.20	(1.30)	.50	(1.73)	.00	(1.41)	.50	(1.29)
	しっかりした	-.20	(1.64)	-.50	(2.52)	-.50	(1.38)	.25	(.96)

注) 表中の数字は、肯定的変化を+とし、否定的変化を-として示している。

表6 「わたし」概念における分散分析の結果

因子	項目	A リーダーシップ	B LOC	A × B
自己尊重	満足	ns	ns	ns
	安定	ns	ns	ns
	幸福	ns	ns	ns
	成功	ns	ns	ns
	自然	4.65 *	ns	ns
	自信	ns	ns	ns
	価値	ns	10.23 **	ns
対人価値	よ親	ns	ns	ns
	親切	ns	ns	ns
	しみの	ns	ns	ns
	感じの	ns	ns	ns
	人に好かれる	ns	ns	ns
肥満性	軽大	ns	ns	ns
	きせ	ns	6.02 *	ns
	いた	ns	ns	ns
力量性	柔軟	ns	ns	4.82 *
	強繊	ns	ns	4.56 *
	細い	ns	ns	ns
独立性	人の先	ns	ns	ns
	に立つ	ns	ns	ns
	どのよ	ns	ns	ns
	うれた	ns	ns	ns
緊張性	くつろ	ns	ns	ns
	生き生	ns	ns	ns
	き健康	ns	ns	ns
	しかった	ns	7.50 *	ns

注) 表中のns は、有意差のないことを示す。また、数字は有意差のあった項目のF値を示す。*は、5%水準で有意差のあることを、**は、1%水準で有意差のあることを示す。

表7 「人間」概念における分散分析の結果

因子	項目	A リーダーシップ	B LOC	A × B
自己尊重	満足	ns	ns	ns
	安定	ns	ns	ns
	幸福	ns	ns	ns
	成功	ns	ns	ns
	自然	ns	ns	ns
	自信	ns	ns	ns
	価値	ns	5.04 *	ns
対人価値	よ親	ns	ns	ns
	親切	ns	ns	ns
	しみの	ns	ns	ns
	感じの	ns	ns	ns
	人に好かれる	ns	ns	ns
肥満性	軽大	ns	ns	ns
	きせ	4.99 *	ns	4.79 *
	いた	ns	ns	ns
力量性	柔軟	ns	ns	ns
	強繊	ns	ns	ns
	細い	ns	ns	ns
独立性	人の先	ns	ns	ns
	に立つ	ns	ns	ns
	どのよ	ns	ns	ns
	うれた	ns	ns	ns
緊張性	くつろ	ns	n	ns
	生き生	ns	n	ns
	き健康	ns	n	ns
	しかった	ns	n	ns

注) 表中のns は、有意差のないことを示す。また、数字は有意差のあった項目のF値を示す。*は、5%水準で有意差のあることを示す。

示していた。

両概念のその他の項目に関しては、統計的な有意差は見られなかった。

2. 個人における両概念の変化

個人ごとに2回の評定の間に2以上の変化がある項目を選び出し、肯定的な変化と否定的な変化の数を調べたのが表8と表9である。なおメンバーの並べ方は上からLOC得点の低い順番である。

表8 「わたし」概念における個人別変化

個 人	D I 群		D E 群		N I 群		N E 群	
	+	-	+	-	+	-	+	-
A	0	0	5	2	7	0	2	2
B	2	2	1	1	1	3	2	2
C	5	1	4	2	6	0	3	3
D	2	2	1	1	0	0	2	0
E	1	1			0	0		
F					3	0		

＋は肯定的変化，－は否定的変化を示す。

表中の数字は、それぞれ変化を示した項目数である。

表9 「人間」概念における個人別変化

個 人	D I 群		D E 群		N I 群		N E 群	
	+	-	+	-	+	-	+	-
A	1	1	2	13	4	0	2	4
B	1	4	3	2	4	7	6	0
C	1	0	7	4	2	0	1	1
D	2	11	1	0	1	2	10	0
E	0	1			5	8		
F					0	0		

＋は肯定的変化，－は否定的変化を示す。

表中の数字は、それぞれ変化を示した項目数である。

これらからわかるように同じ群の中でも個人によっても、概念によってもその変化はかなり異なっている。例えばD I 群のCは「わたし」概念では肯定的な変化をかなり示しているものの、「人間」概念においてはあまり変化がみられない。それと同じ群のDは「わたし」概念では肯定的な変化と否定的な変化がともに少しずつみられるが、「人間」概念では否定的変化が多数を占めている。これと同じことがN I 群のCとBの間にも言える。

このような変化はグループ経験の中での筆者の観察と一致しているようである。例えばN I 群のBは初回から積極的に参加し、自分の望む仕事をしたいという悩みを述べていたが、ややおせっかいな態度が他のメンバーに受け入れられないところがみられた。またN I 群のCは第2セッションの終わり頃から少しずつ発言し、夫婦関係での悩みなどを話し、「素直にしゃべっている、真剣に聞いてあげる雰囲気」を味わっていた。そうして途中からはグループの世話役的な働きを買って出るようになった。

このように各人の変化が互いにかなり異なり、そのため平均値としてはグループ経験による変化が打ち消されているように思われる。またN I 群において否定的変化が少ない人が最も多いように思われる。

考 察

本研究では、指示的グループ、非指示的グループおよびI-E尺度という独立変数に関して改良した上で、相互作用仮説を検証しようとした。

その結果、「わたし」概念、「人間」概念のいずれにおいても相互作用仮説を支持するような結果は得られなかった。また個人ごとにデータを見てみるとN I 群に否定的変化の少ない人が多かった。

Rotter (1975) と Messer & Meinster (1980) の指摘をうけて、本研究においては鎌田他 (1982) のLOC尺度を用いた。この尺度を使用したために、内的統制型と外的統制型をより正確に区別でき、本研究のような結果が導かれたのかもしれない。しかし、この尺度がRotter (1966) のI-E尺度にくらべてグループ経験に関する研究にどの程度適切なものかは、検討されていない。今後の検討にまたねばならない。

また、本研究の結果をすべてのグループ経験について一般化するのは、早急すぎるであろう。これは一口に指示的グループといってもそのグループ経験の内容にかなりの違いがあるからである。非指示的グループに関してもこの点は同様である。これらの違いを明確化するために、本研究ではLieberman et al. (1973) のリーダーの行動分類に基づいてリーダーの発言を分類した。今後の研究としてはリーダーの指示的発言の量を操作する必要があるだろう。その結果、本研究の結果が一般化できるかどうか、また相互作用仮説を支持するような結果が得られるかどうかを検討すべきである。その際、リーダーの人間観および倫理上の問題があるため、操作の範囲に制限があるのは当然であろう。また指示的発言といっ

ても、その及ぼす力というものは異なる。そのため、その発言の強さという次元も含めた分類が今後期待される。

本研究では各個人の改善というものがSD法における肯定的な方向への評価の変化に反映されているとした。しかし、何人かの人が同様により「しっかりした」と評価したとしても、それがその個人にとってどれほどの意味をもっているかは、それぞれ違うのではないだろうか。そのような点から、個々のメンバーの期待や悩みの変化を測定するのにふさわしい測度が考えられる必要があると思われる。

本研究が月に1セッションという実施頻度であるという点が相互作用仮説を検討する際にも、関係しているのかもしれない。実施頻度は、従来の研究が週2セッションまたはマラソン形式という具合で本研究の場合とはかなりの違いがある。このような差異は、従来の研究と違った影響を参加メンバーに与えているものと思われる。この点に関して、実際に参加メンバーがどのような感想を持っているかという「月1回ぐらいの方がしんどくはない」というものから「1ヵ月の間、放っておかれるのは辛かった」というものまでいろいろであった。参加メンバーの感想から、頻度の低さについて一定の影響を推測するのは困難なようである。従来の研究においても、効果と継続期間および頻度との関係について、明らかな関係は見出されていない。本研究における結果の交差妥当性を検討するためにも、より高頻度のグループ経験を用いた研究をおこなうことが望ましい。

また本研究のように実際のグループ経験を用いた研究の問題点として、元々そのグループに適した人々が特定タイプのリーダーシップのもとへ集まるのではないか、ということも十分に考えられる。もし指示的グループおよび非指示的グループの参加メンバーのLOC尺度得点の分布に差がなければ、内的統制、外的統制と一口に言えないことになるだろう。つまり内的統制の内にもいろいろな質の人が含まれているのかもしれない。これは外的統制にも当てはまる。このことに関して、従来言われている防衛的外的統制と不適応を示す外的統制を区別して考えるのも参考になるかと思われる。

(最後に、この研究を行うにあたり多大なご協力をいただいた金沢大学教養部の多田治夫教授に感謝の意を表します。)

引用文献

- Abramowitz, C. V., Abramowitz, S. I., Roback, H. B., & Jackson, C. 1974 Differential effectiveness of directive and nondirective group therapies as a function of client internal-external control. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 849-853.
- 鎌田雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- Kilman, P. R., & Howell, R. J. 1974 Effects of structure of marathon group therapy and locus of control on therapeutic outcome. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 912.
- Kilman, P. R., Albert, B. M., & Sotile, W. M. 1975 Relationship between locus of control, structure of therapy, and outcome. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 588.
- Lieberman, M. A., Yalom, I. D., & Miele, M. B. 1973 *Encounter groups: First facts*. New York: Basic Books.
- Messer, S. B., & Meisner, M. O. 1980 Interaction effects of internal vs. external locus of control and directive vs. nondirective therapy: Fact or fiction? *Journal of Clinical Psychology*, 36, 283-288.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80 (1, Whole No. 609).
- Rotter, J. B. 1975 Some problems and misconceptions related to the construct of internal versus external control of reinforcement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 56-67.
- Smith, P. A. 1962 A comparison of three sets of rotated factor analytic solutions of self-concept data. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 326-333.
- 多田治夫 1982 SD法によるエンカウンター・グループの評価 臨床心理学の諸領域—金沢大学臨床心理学研究室紀要— No.1, 29-32.